

## 第二章 教育家としての博士

### 一、實務家的藝術家的人格

英國識者  
の推稱

琵琶湖疏水大事業のいまだ完成せざりし明治二十一年に於いて、英國の識者は、既にこの時、博士の人物を傳へて「間々學者にあるところの缺點あるを見ず、君は實用の器量を有す」と推稱し、博士がよく幾多の功業をなし遂げたる後に及んでや、スタンダードの記者は、次の如く博士の人格に對する印象を報じて居るのである。

博士は工科の人に似ず、趣味頗る廣く、文學を愛讀し、音曲に堪能にして、殊に彈箏に妙を極む。其の夫人は北垣氏(國道)の女たり、夫人との間に四男一女あり、其の長子先年東京大學在學中天折するや、博士之を悲むの情逆りて雜誌太陽に一文を寄す、行文悲痛、一讀斷腸の感あらしむ。然も其の意や、自己の悲みに同情を求めんことをあらずして、斯かる場合に於ける親としての處置と立場を教へたるもの、言々血を吐き涙を絞る、東都の文壇推稱して近來の大文學ミなす。工科の人にして斯くの如き文筆に名を致したるは、博士を以つて隨一ミ云ふべし。多趣味の博士は、又石齋ミ號して書を能くし、加ふるに篆刻に長じ、暇あれば即ち鐵筆を振ふ

こ云ふ如き、多藝多能眞に珍多するに足る。

博士爲人慎沈一見威容甚だ嚴なるが如きも、之に接すれば温情自ら春風を長ずるの感あり。多趣味の人丈に話材頗る豊富にして、工學博士にして見るよりも、寧ろ一種の藝術家として見るの勝れるを思はしむ。

大正七年六月發行スタンダード第二卷第六號所載

彼此二面  
の觀察

即ち彼は博士の實務的器量の偉大を説き、此は博士の藝術家的風格の超焉たるを賞揚す。即ち知る。博士の全人格は彼此兩面を包含し、渾然統合して、所謂天衣無縫の觀をなせるにあることを。

然して然らば教育家としての博士は如何。

## 一一、ダイヤヤー氏と博士

恩師ダイ  
ヤー氏を  
頌起す

教育家としての博士を傳ふるに臨みて、先づ想起せらるゝは、博士の恩師ダイヤヤー氏のことである。氏が我が國當路者の懇請を容れ、ランキン博士及びマセン氏の推薦により、明治七年來朝し、爾來八年、我が國に於ける工業教育の大基礎建設したる偉業は、既に編者の前編に述べしところである。

恩師の教訓に曰く

博士の氏に師事するの厚き、又こゝに重ねて記すまでもない。博士は世界的名聲を馳するに至りし後も、事ごとに恩師を思慕して止まず。嘗つて其の教訓を記して曰く、

ダイヤール先生は又語つて曰く、「一體創立事業は非常の注意を要する者である世間ではつまらぬ事によつて大事業の全體を破壊する者が少くない、凡そ人は其の職務に必要な學識才幹の外人をして敬服せしむるの徳がなくてはならぬ、教育を司ざるものは教育以外の天地に人を心服せしむるの人望がなくてならぬ」以つて先生が人生に對する見識のほゞを見るべし。先生の日本へ來られたる時已に家妻を有して携へ來られたるが如き、これ先生平生の用意を示したるものにして曰く「余は英國のホームの美はしさを日本人のみならず、一般同僚間にまで感化を及ぼさんとする者である」佳い哉言や、先生已にこの綽然の志操あり、推して其の一世の徑路を知るべき乎。

ダイヤール氏と博士の處世上の徑路相一致す

願ればダイヤール氏の重任を帯びて來朝せる歳僅に二十有四、博士の疏水大工事に着手せるや二十三歳を出でず。兩者が非凡なる處世の徑路の自ら相一致せるものあるを知らば、教育家としての博士が、如何にダイヤール氏のそれに神會默契する

ところ多きやも類推するに難くないであらう。